

二〇二三年度 早稲田大学大学院文学研究科 入学試験問題  
 【修士課程】 専門科目 日本語日本文学コース ※解答は別紙(縦書)

### 注意事項

- 1 問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 2 受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。
- 3 問題はこのページを含めて1～7ページである。  
 問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に専攻する専門分野の選択肢が掲出してあるので、該当するものを○で囲むこと。  
 問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、問題二全体の得点はゼロとなる。  
 問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。
- I 日本語学領域 2ページ
- II 古典文学領域 3～4ページ
- III 近現代文学領域 5～7ページ

4 解答用紙は四枚表裏。1～8ページである。問題との対応は次の通り。

問題一
問題二
問題三

I	日本語学領域	1～2ページ
II	古典文学領域	3～4ページ
III	近現代文学領域	5～8ページ

- \* 解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。  
 \* 設問の指示に従い、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

## 【問題一】〔共通問題〕

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

## 【問題二】〔共通問題〕

- ・ 次のABC群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
- ・ 一般外国語で「日本語」を受験する者は、ABCのいずれか一つの群の代わりとしてG群の問いを選択できる。
- ・ 解答の冒頭には、それぞれ選択した問いの記号(A1など)を明記せよ。
- ・ 三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無解答の場合、問題二全体の得点はゼロとなる。

## 【A群】日本語学領域

A1 二〇〇七年二月、文化審議会国語分科会が文部科学大臣に答申した「敬語の指針」にある《敬語の五分類》について説明せよ。

A2 日本語の語彙をその語種(出自・由来)によって三分類し(混種語は除く)、それぞれの特徴について説明せよ。

A3 日本語の表記において音象徴語(オノマトペ)や外来語以外に片仮名が用いられる場合のあることについて、その理由を説明せよ。

## 【B群】古典文学領域

B1 日本古典文学作品と映像作品との関係について、具体例を挙げて述べよ。

B2 日本古典文学作品と「旅」について、具体例を挙げて述べよ。

B3 日本古典文学のオリジナリティについて、具体例を挙げて述べよ。

## 【C群】近現代文学領域

C1 近現代文学に翻訳がもたらした影響について、具体的な例を挙げて論評せよ。

C2 近現代文学と宗教との関わりについて、具体的な例を挙げて論評せよ。

C3 近現代文学において出版はどのような意味を持ってきたか、具体的な例を挙げて論評せよ。

## 【G群】一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のABC群の中の一つの群の代わりとして選択できる問題。

G1 あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、代表的な論文・研究書または研究者名を具体的に挙げて説明せよ。

## 【問題三】〔選択問題〕 I II IIIから一領域を選択解答せよ。

## I 日本語学領域

1 各自の関心がある研究領域において、資料(データ)を取り扱う上で留意すべきこととがらを具体的に述べよ。

2 次のA～Fから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。

A 中央語史ならびに現代方言にあらわれる「打消過去」の表現について知るところを述べよ。

B 中央語史におけるタ・ダ行子音の変遷について知るところを述べよ。

C シネクドキ(提喻・synecdoche)について知るところを述べよ。

D 副詞研究の課題について考えるところを述べよ。

E 日本語の文字における字形・字体・書体の概念について知るところを述べよ。

F 訓読みの歴史について知るところを述べよ。

古典文学領域

(一) 次に掲げる語群いゝうの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明せよ(一題につき五行程度)。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い	中皇命	ろ	国見歌	は	古事記	に	王辰爾
ほ	有明の別れ	へ	宇治の中の君	と	落窪物語	ち	四辻善成
り	大江千里集	ぬ	和泉式部	る	玉葉和歌集	を	心敬
わ	古事談	か	平家公達草紙	よ	徒然草	た	異類物
れ	向井去来	そ	上田秋成	つ	俳書	ね	読本
な	冥報記	ら	千載佳句	む	朝野群載	う	都良香

(二) 次のA～Iの中から一題を選び、論述せよ(二十行程度)。

- A 『万葉集』巻一について。
- B 『日本書紀』神代巻の特色。
- C 平安朝和歌における折と場。
- D 『源氏物語』の成立基盤。
- E 和歌詠作における本説取り。
- F 中世散文作品と戦乱。
- G 『猿蓑』。
- H 曲亭馬琴と俳諧。
- I 日本古典文学と『藝文類聚』。

(三) 次のア～キの中から一つ選び、本文の直後の( )内の指示に従って解答せよ。

(ア) 新年乃始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘其騰

(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

(イ)

愛我那邇妹命爾為然者吾一日立千五百産屋

(右をすべて平仮名で書き下し、どのような場面における記述か説明せよ。)

(ウ)

かゝる乃乃露わをらま思りさくかれ  
羨のゆくりハミさやーぬらん

(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

(エ)

初結  
草もあはれ鳴はしむるみほし  
風も枯るひさしむるみほし

(右の影印の全文を翻字し、和歌を現代語訳せよ。)

(オ)

はまよあはれんてんの産せんもたけしたる  
にんまよあはれんてんの産せんもたけしたる

(右の影印の全文を翻字し、傍線部の語について説明せよ。)

(カ)

笠重 吳天雪  
我雪とみりてくろく笠の上 其角

(右の発句を前書きとともに丁寧に翻字して、その後に前書きとともに解釈せよ。)

(キ)

雲生似蓋霧起如煙 山行 無松万歳即拍千手 山行

(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

※WEB掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。  
愛媛県歴史文化博物館所蔵

III 近現代文学領域

(一) 次のA1、2、B1、2は、日本の近現代文学の代表的な作品の一節である。これら四つについて、①用語・文法・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自由に論ぜよ。

A1 近松秋江「別れた妻に送る手紙」

拝啓

お前——別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける権利は無い。それのみならず、風の音信に聞けば、お前はもう疾に嫁いでゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お前はもう取返し付かぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理から言つても私が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼び掛けるにゐる。どうぞ此の手紙だけはお前と呼ばせてくれ。また斯様な手紙を送つたと知れたなら大変だ。私はもう何うでも可いが、お前が、さぞ迷惑するであらうから申すまでもないが、読んで了つたら、直ぐ焼くなり、何うなりしてくれ。——お前が、私とは、つい眼と鼻との間の同じ小石川区内にゐるとは知つてゐるけれど、丁度今頃は何処に何うしてゐるやら少しも分らない。けれども私は斯うして其の後のことをお前に知らせたいいや聞いて貰ひたい。お前の顔を見なくなつてから、やがて七月になる。その間には、私には種々なことがあつた。——

一緒にゐる時分は、ほんの些とした可笑いことでも、悔しいことでも即座に打ちまけて何とか彼とか言つて貰はねば気が済まなかつたものだ。またその頃はお前の知つてゐる通り、別段に変わったことさへなければ、国の母や兄とは、近年ほんの一月に一度か、二月に三度ぐらゐしか手紙の往復をしなかつたものだが、去年の秋私一人になつた当座は殆ど二日置きぐらゐに母と兄とに交るゝ手紙を遣つた。

けれども今、此処に打明けようと思ふやうなことは、母や兄には話されぬ。誰れにも話すことが出来ない。唯せめてお前にだけは聞いて貰ひたい。——私は最後の半歳ほどは正直お前を恨んでゐる。けれどもそれまでの私の仕打に就いては随分自分が好くなかつた、といふことを、十分に自身でも承知してゐる。だから今話すことを聞いてくれたならば、お前の胸も幾許か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありつたけ話し尽したならば、私の此の胸も透くだらうと思ふ、さうでもしなければ私は本当に氣でも狂れるかも知れない。出来るならば、手紙でなく、お前に直に会つて話したい。けれどもそれは出来ないことだ。それゆゑ斯うして手紙を書いて送る。

お前は大方忘れたらうが、私はよく覚えてゐる。あれは去年の八月の末——二十日の朝であつた。お前は、

「もう話の着いてゐるのに、あなたが、さう何時までも、のんびんぐらりと、ずる／＼してゐては、皆に、私が矢張りあなたに未練があつて、一緒にする／＼になつてゐるやうに思はれるのが辛い。少しは、あなただつて人の迷惑といふことも考へて下さい。いよ／＼別れて了へば私は明日の日から自分で食ふことを考へねばならぬ。……それを思へば、あなたは独身になれば、何うしよう、足纏ひがなくなつて結構気楽ぢやありませんか。さうしてゐる内にあなたはまた好きな奥さんなり、女なりありますよ。兎に角今日中に何処か下宿へ行つて下さい。さうでなければ私が柳町の人達に何とも言ひやうがないから。」と云つて催促するから、私は探しに行つた。

二十十日の蒸暑い風が口の中でジャリ／＼するやうに砂塵埃を吹き捲つて夏劣けのした身体は、唯歩くのさへ怠儀であつた。矢来に一処あつたが、私は、主婦を案内に空間を見たけれど、假令何様な暮しをしようとも、これまで六年も七年も下宿屋の飯は食べないで来てるのに、これからまた以前の下宿生活に戻るのかと思つたら、私は、其の座敷の、夏季の間に裏返したらしい畳のモジヤ／＼を見て今更に自分の身が淺間しくなつた。それで、

「多分明日から来るかも知れぬから。」

と云つて帰りは帰つたが、どう思つても急に他へは行きたくなかつた。といふのは強ちお前のお母さんの住んでゐる家——お前の傍を去りたくなかつたといふのではない。それよりも斯うしてゐる自然に、心が交つて行く日が来るまでは身体を動かすのが怠儀であつたのだ。

A2 夏目漱石「道草」

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の奥がまだ付着してゐた。彼はそれを忍んだ。一日も早く其奥を振り落さなければならぬと思つた。さうして其奥のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。

彼は斯うした気分を有つた人に有勝な落付かない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二返づゝ規則のやうに往來した。ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出会つた。其人は根津権現の裏門の坂を上つて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けやうとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は静であつた。二人の間にはたゞ細い雨の糸が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色なく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづつ動いて回るのに気が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳になるかならない昔の事であつた。それから今日迄に十五年の月日が経つてゐるが、其間彼等はついぞ一度も顔を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で交つてゐた。黒い髭を生じて山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに交らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の色が、何故今でも元の通り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な気分を与へる媒介となつた。

彼は固より其人に出会ふ事を好まなかつた。万一出会つても其人は自分より立派な服装でもしてゐて呉れ、ば好いと思つてゐた。然し今日前見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても、決して思へなかつた。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判断したところ、何うしても中流以下の活計を営んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐる洋傘が、重さうな毛織子であつた事に迄気が付いてゐた。

其日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされた。然し細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくらか話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙つてゐる夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二〇二二年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦書)

B1 林芙美子「放浪記」

B2 安部公房「S・カルマ氏の犯罪―壁―」

(十二月×日)

さしはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降つてゐる。私はこの啄木の歌を偶つと思ひ浮べながら、郷愁のやうなものを感じてゐた。便所の窓を明けると、夕方の門燈が薄明るくついでゐて、むかし信州の山で見たしやくなげの紅い花のやうで、とても美しかった。

「婢やアお嬢ちゃんおんぶしておくれツ」

奥さんの声がしてゐる。

あゝあの百合子と云ふ子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似てゐて、神経が細くて全く火の玉を背負つてゐるやうな感じである。

せめてかうして便所にはいつてゐる時だけが、私の体のやうな気がする。

(バナナに饅頭、豚カツに蜜柑、思ひきりこんなのが食べてみたいなア。)

気持ちがあつてなつてくると、私は妙に落書きをしたくなつてくる。豚カツにバナナ、私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶつて廊下を何度も行つたり来たりしてゐる。秋江氏の家へ来て、今日で一週間あまりだけれど、先の目標もなささうである。この先生は、日に幾度も梯子段を上つたり降りたりしてゐる。まるで廿日鼠のやうだ。あの神経には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠つたかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心をしたやうにぢんぢんばいりをしつて二階へ上つて行く。

私は廊下の本箱から、今日はチエホフを引っぱり出して読んだ。チエホフは心の古里だ。チエホフの吐息は、癡は、みな生きて、黄昏の私の心に、何かブツブツものを言ひかけて来る。柔かい本の手ざはり、この先生の小説を読んではると、もう一度チエホフを読んでもいいのになと思つた。京都のお女郎の話なんか、私には縁遠い世界だ。夜。

家政婦のお菊さんが、台所で美味しさうな五目寿司を拵へてゐるのを見てとても嬉しくなつた。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしづまりすると、もう十一時である。私は赤ん坊と云ふものが大嫌ひなのだけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶされると、すぐウトウトと眠つてしまつて、家の人達が珍らしがつてゐる。

お蔭で本が読めること――。年を取つて子供が出来ると、仕事も手につかない程心配になるのかも知れない。反感がおきる程、先生が赤ん坊にハラハラしてゐるのを見ると、女中なんて一生するものではないと思つた。

かまごやしにだつて、可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野そだちな人だけれど、眠つたやうなひとで、この家では私は一番好きなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持つて、汽車道の上に乗つた陸橋の上で、貰つた紙包みを開いて見たら、たつた二円はいつてゐた。二週間あまりも居て、金二円也。足の先から、冷たい血があがるやうな思ひだつた。――ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いてゐると、何だかザラザラした気持ちで、何もかも投げ出したくなつてきた。通りすがりに着いた瓦葺きの文化住宅の貧家があつたので這入つてみる。庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に靡いたやうに冷たく光つてゐた。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

二〇二三年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦書)

(二) 次の中から四題を選び、論評せよ(選んだ番号を、指定欄に記すこと)。

- 1 紅露道鷗の時代の文学状況を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 2 近現代文学におけるフェミニズム批評の重要性を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 3 ドイツ文学と近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 4 近現代文学における言論統制を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 5 近現代文学における文学流派(エコール)について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 6 占領期日本の文学の特色を、複数の作家と作品に言及しながら論評せよ。
- 7 近現代文学における草稿研究の意義について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 8 映画と近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 9 近現代文学研究におけるデジタル化の意義について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 10 近現代文学にかかわる近年の資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ(以上)とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

## 日本語日本文学

総 点

--

「」から記入すること

### 問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、「」内の該当する時代等、ならびに散文・韻文にも○を付すこと。

日本語学領域

古典文学領域 「上代・中古・中世・近世・和漢比較文学」 / 散文・韻文

近現代文学領域

### 問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例 A1）を明記すること。

「これより先の余白」は絶対に記入しなすこと

(次頁へ続く)

ここに記入すること

問題三

I 日本語学領域 / II 古典文学領域

(選択した領域を○で囲め) ※問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。



A large area consisting of many vertical lines, intended for writing the answer.

(へ 答へ欄)

Blank lined area for writing.

—これより先の余白には絶対に記入しないこと—

ここに記入すること

問題三

近現代文学領域

(一) A 1

(一) A 2



(裏へ続)

(一)  
B  
1

(一)  
B  
2

——「これより先の余白には絶対に記入しないこと」——

（裏）続く

Blank lined area for writing.

( ) ( ) ( )

Blank lined area for writing.

( ) ( ) ( )

ここに記入すること

Blank rectangular box.

(1) ( )

(1) ( )

「これより先の余白には絶対に記入しないこと」